

東アジア先史時代の編物

松永 篤知

(日本考古学協会 会員)

1. はじめに

我々人間にとって生活の基礎は、言わずもがな衣食住である。今も昔も、人間が人間である限り、これらはいずれも欠かすことができない。この衣食住には様々な生活道具が関わっており、それらが製作・使用された結果として、豊かな物質文化が現れる。

「細長い素材を組んだり絡めたり巻き上げたりして平面ないし立体を形成したもの」、すなわち編物は、衣食住全てに関わる生活道具の一つであり、代替品が少ない先史時代においては物質文化の重要な位置を占めていたものと考えられる。いくつか例を挙げれば、衣に関するものとして編布（衣服の可能性）、食に関するものとしてカゴ類（採集食物の運搬用・貯蔵用）・釜・網・魼、住に関するものとして住居用敷物・壁材、衣食住以外に関するものとして土器製作用敷物・漆漉し用編布（漆漉し布）・石器収納容器などがある。これだけでも、編物が先史時代の生活にいかに重要な存在であったかが、容易に推測できよう。

本論では、東アジア先史時代の編物を取り上げ、それらが当時どのように製作・使用されてきたのか、現在得ることができる情報を基に明らかにする。近年、縄文時代の日本列島を中心に先史編物研究は様々な動きを見せているが、それらも踏まえつつ、筆者なりの先史編物論を提示したい。

2. 先史編物研究の基本

東アジア先史時代の編物について論じる前に、研究の基本について述べておきたい。ここで言う研究の基本とは、これまでの研究史と資料の見方のことである。

1) 考古学における先史編物研究略史

まず研究史についてであるが、東アジアにおける先史編物研究の歴史はかなり古く、特に日本考古学では東京都大森貝塚の発掘調査にまで遡る。以下、我が国における先史編物研究の歴史を、3期に分けて概観す

ることにしたい。

第1期 1879（明治12）年～1967（昭和42）年

我が国で先史編物研究が始まり、その基礎が作られた時期を第1期とする。

日本初の考古学的発掘報告『大森介墟古物篇』[モース 1879]においてE.S. モース氏は、縄文土器底部に敷物の圧痕（mat impression、蓆紋・席紋）が残されていることを指摘した。写実的な図（図1）から、それが「広義の網代編み」の編物を原体とする網代圧痕であることが分かる。日本考古学の最初期から、土器底部にまで観察が及んでいたことは、驚くべきことであろう。

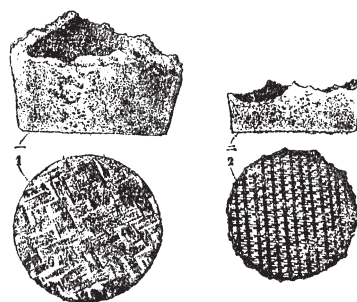


図1 モース氏が紹介した大森貝塚の網代圧痕 [モース 1879]

それから20年後、坪井正五郎氏が「日本石器時代の網代形編み物」[坪井 1899]を発表し、縄文土器底部の網代圧痕を分類・整理した。この論考で特に重要なのは、網代編みの条材の交差構造を「超え」・「潜り」・「送り」で表示する方法を提示したことである（図6）。近年否定的な意見もあるが [名久井ほか 2012]、客観的な数値によって編み方を表すことができるこの表現方法は実際有用であり、現在に至るまで網代編み分類の基礎となっている。

大正末から昭和初期にかけては、杉山寿榮男氏の活躍があり [杉山 1927・1930・1942a・1942b]、編物資料に対する民俗考古学的研究の先駆けとして知ら

れている。杉山氏は、編物の考古資料を実物・圧痕とともに広く収集し、民具と比較しながらその組織や素材について詳しく観察した。特に、「飛し網代編」・「四方網代」・「透編」・「笄編」・「柵形網代」・「籠目編」といった民具の呼称を用いながら、考古資料と民具の類似性を指摘している点は、明治期にはない視点であった。

1960年代に入り、編物研究は様々に展開する。1960年代初頭には、大脇直泰氏 [大脇 1961]・鏡山猛氏 [鏡山 1961a・1961b・1962] による組織痕土器 (図2) の研究があり、それぞれ分類・分布・時期が示されている。結果、組織痕土器器面に残された圧痕の原体が編布 (席目)・網 (網目)・織物 (布目)・カゴ (籠目) であること、その背景には土器の型取り技法があること、九州地方の縄文時代晩期に特徴的に見られる事象であることなどが明らかにされた。この組織痕土器については、先史時代の布資料 (編布・織布) として注目されることが多く、角山幸洋氏は弥生時代における織物起源解明の手がかりとして取り上げている [角山 1962] ¹⁾。

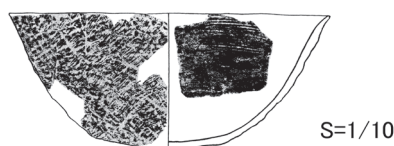


図2 組織痕土器の一例 (席目)
※佐賀県女山遺跡 [鏡山 1972]

1964年には、小林行雄氏が、『続古代の技術』 [小林 1964] に一章を設けて縄文時代から古代までの編物資料 (実物・圧痕) を整理している。注目すべきは、技術的視点を軸に、編み方の考古学的表現・民具表現が適宜使い分けられていることである。編物資料には様々な属性があり、小林氏のような一視点 (一表現) にとらわれない姿勢は、現在の編物研究においても大いに見做すべきであろう。

1966年、伊東信雄氏は、縄文時代の布資料を実物・圧痕ともに収集し、その製作技法を復元した [伊東 1966]。具体的には、新潟県の民俗例である越後アンギン (織機を使わずもじり編みで編んだ布) 同様、編み台と編み錘のセットによって製作されたものと推測している。また伊東氏は、縄文時代の布を編布 (あんぎん) と呼ぶことを提唱しており、それが今でも引き

継がれている。

同年には、額田巖氏による「Basketry の研究」 [額田 1966] も発表されている。額田氏は、世界各地の考古資料・民具資料の編み方や素材に着目し、それらに関係性があることを指摘した。元は竹製民具研究 [額田 1965] の延長であったが、その視点は考古学的にも重要である。

ところで隣国の中国では、1934年にN. パームグレン氏によって、甘粛省の馬家窯文化半山類型・馬廠類型の土器底部に敷物の圧痕が見られることが指摘されている [Palmgren 1934]。その後1960年代には、浙江省銭山漾遺跡の実物資料 [浙江省文物管理委員会 1960] や陝西省半坡遺跡の圧痕資料 [中国科学院考古研究所・西安半坡博物館 1963] に若干の分類が試みられている。しかし、銭山漾遺跡の分類・表現方法の一部 (○経○緯人字紋: 図3) を除いてほとんど単発的なものに終わっており、その後の研究に大きな展開はなかった。

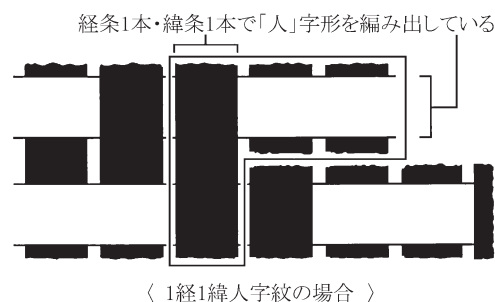


図3 中国の網代編み分類・表現方法
[松永 2003 を改変]

第2期 1968 (昭和43) 年～1979 (昭和54) 年

第2期は、荒木ヨシ氏による網代圧痕三部作の発表を始まりとし、主に編物圧痕資料の研究が進められた時期である。

1968年から1971年にかけて、荒木ヨシ氏は、縄文土器底部の網代圧痕 (もじり編みのスダレ状圧痕も含む) について総合的な研究をおこなっている [荒木 1968・1970・1971]。荒木氏は、坪井氏の編み方分類を基に網代圧痕を46型式に分類し、圧痕原体となった土器製作用敷物のあり方について様々な角度 (編み方・利用法・素材など) から分析した。種々の網代圧痕を、土器製作技術の視点からも子細に観察することで先史編物の実態に深く迫っており、学史上特筆すべ

き研究である。

荒木氏の網代圧痕三部作と同じ頃、小笠原好彦氏の布資料研究や安孫子昭二氏の網代圧痕研究も発表されている。

1970年、小笠原好彦氏は、「縄文・弥生式時代の布」[小笠原 1970]と題して、編布と織布の資料を整理し、両者の比較をおこなった。分析の結果、縄文時代晩期の編布の緯糸密度と織布の経糸密度に差があまりないことから、当時の紡績技術の低さが導き出されている。

1971年、安孫子昭二氏は、東京都平尾No.9遺跡の発掘報告[安孫子 1971]において、網代圧痕の編み方に東西差があることを指摘した。静岡県蜷塚遺跡付近を境に、東日本では2本超え1本潜り1本送りが、西日本では2本超え2本潜り1本送りが基本的編み方となるという仮説が示され、後の地域性研究に少なからず影響を与えた。

1976年には、渡辺誠氏のスタレ状圧痕研究と、角山幸洋氏の縄文時代晩期編物研究がある。

渡辺誠氏は、もじり編み圧痕の一種であるスタレ状圧痕を取り上げ、様々な角度から分析した[渡辺 1976]。編布圧痕や民具資料との比較もおこなわれ、原体となった編物がどのようなものであったのかが、かなり具体的に推定されている。これは、スタレ状圧痕の総合的研究としても、民俗考古学的研究としても、重要な研究として位置づけられる。

一方、角山幸洋氏は、織物起源解明の視点から縄文時代晩期に見られる編物（主に編布・網）の組織を分析した[角山 1976]。同氏の研究は第1期にも見られたが、14年を経てより深化した見解（編物から織物への非連続的な転換、機織文化の波及）が示されている。

第3期 1980（昭和55）年～現在

第3期は、実物資料・圧痕資料の充実により、様々な研究が展開するようになった時期である。植松なおみ氏の「古代遺跡出土カゴ類の基礎的研究」[植松 1980]以来、実に多くの研究論文が発表されている。該期については、第1期・第2期に比べて論文数が多いため、主な研究視点ごとに整理して成果を見ることにしたい。

さて、日本考古学における先史編物研究の主な視点は、以下の5つに分けることができる。(1) カゴ類を

中心とした実物資料の研究(植物考古学的研究を含む)[あみもの研究会 2012、小笠原 1983a、植松 1980、黒沼 2009、小林・鈴木 2014、佐々木 2006、佐々木・小林・鈴木・能城 2014、米田・佐々木 2014、永嶋 1985、賀川 1988、野田 2005、堀川 2011、本間 2005、松永 2010・2013a・2013b・2013c・2014、柳原 2008、山本 1989、渡辺 1982・1994・2000]、(2) 編布の研究[安藤 2005、小笠原 1983b、尾関 1996・2007・2012、布目 1988・1992、松浦 2005、松永 2011b、渡辺 1985a・1992・1995・2003a]、(3) 民俗考古学的研究[東京都立大学人類誌調査グループ 2002・2005、名久井 1998・1999・2004・2009、名久井ほか 2012、山本 1989、渡辺 1985b・1996・1999・2006a]、(4) 県など小地域を対象を絞った圧痕研究[岡元 1986、川端 1983、北田・平野 2007、篠原 2001、長沢 1986・1988、東 2006、前迫・前迫 2006、村越 1985]、(5) その他の視点による編物圧痕研究[秋田 1990・2006・2008、荒木 1995、植松 1981、鐘方・角南 1997、田代 1999、東 1998、松永 2003・2004・2006・2008a・2008b・2008c・2010・2011a・2012a・2012b・2014、真邊 2013・2014a・2014b、渡辺 1991・2006b]、の5つである。ただしこれは、研究内容をあくまで単純化したものである。個々の研究を見ると、主眼は上記のいずれかに該当しながらも、内容は複数の視点にまたがる場合が多い。筆者も(5)を主眼にしてはいるが、(1)～(4)を視野に入れて研究を進めている。

(1)の「カゴ類を中心とした実物資料の研究」については、植松なおみ氏の基礎研究(縄文時代～古墳時代を中心とする資料の収集・整理および視点の提示)[植松 1980]以来、カゴ類の編み方や素材について検討することが基本となっている。その結果、カゴ類の編み方に一定のパターンや傾向性があること[野田 2005、柳原 2008ほか]や、素材に地域性があること[あみもの研究会 2012、黒沼 2009、佐々木 2006、堀川 2011ほか]などが明らかにされてきた。特に近年は、植物考古学の発展に伴い、素材を中心に研究が進められる傾向が強くなっている[小林・鈴木 2014、佐々木・小林・鈴木・能城 2014、米田・佐々木 2014]。

(2)の「編布の研究」は、編物というよりも、布

の研究という性格が強い。これは、織物に先行する布という編布の特性上、当然のことである。特に、尾関清子氏〔尾関 1996・2007・2012〕と渡辺誠氏〔渡辺 1985a・1992・1995・2003a〕の研究が代表的で、編布にも種類があること、様々な用途に使用されていることなどが明らかにされている。また、布目順郎氏による素材研究〔布目 1988・1992〕も重要である。

(3)の「民俗考古学的研究」については、考古資料の編み方や素材などに近現代民具との共通点が見られることが明らかにされている。その際、主に引き合いに出されるのは、マタタビやヒノキといったタケ・ワラ以外の素材を使用している地域の民俗例〔東京都立大学人類誌調査グループ 2002・2005、山本 1989、渡辺 1985b・1996・1999〕である。その中で、渡辺誠氏が提唱した「タケ・ワラ以前」という概念〔渡辺 1985b〕は、重要な指摘である。また近年は、『竹編組技術資料』を基に資料を捉えるという名久井文明氏の主張〔名久井 2004〕が、かなりの存在感を持って多くの研究者に影響を与えている。

(4)の「県など小地域を対象を絞った圧痕研究」については、各地域研究者の地道な集成がその素地になっている。主な例としては、東北地方北部〔村越 1985〕・岩手県〔北田・平野 2007〕・山梨県〔長沢 1986・1988〕・石川県〔川端 1983〕・栃木県〔篠原 2001〕・九州地方南部〔岡元 1986、東 2006、前迫・前迫 2006〕で研究が展開されており、それぞれの地域における圧痕の種類や変遷が明らかにされている。

(5)の「その他の視点による圧痕研究」は、一括りにしたが、内容は実に多様である。東北型網代圧痕〔植松 1981〕・組織痕土器〔東 1998、渡辺 1991・2006b〕・カゴ型土器〔鐘方・角南 1997〕といった特殊な圧痕資料の研究、東アジア的視点からの総合的研究〔松永 2003・2004・2008a・2008b・2008c・2010・2011a・2012a・2012b・2014〕、レプリカ法による研究〔真邊 2013・2014a・2014b〕、土器製作技術を主眼に置いた研究〔秋田 1990・2006・2008〕などがあり、多くの情報が引き出されている。

なお、野田真弓氏による鳥取県青谷上寺地遺跡の編物実物資料報告〔野田 2005〕が発表された 2005 年を画期として、第 3 期を二分することも可能であると思われる。この報告以後、カゴ類に注目が集まり、研究が盛んになったからである。

さらに、2012 年も研究に大きな動きがあった年である。あみもの研究会のシンポジウム開催〔あみもの研究会 2012〕、『考古学ジャーナル』の特集掲載〔名久井ほか 2012〕、尾関清子氏の編布研究集大成刊行〔尾関 2012〕が相次いだ。さらに筆者の課程博士論文〔松永 2013a〕も、提出はこの年の末である。今後の研究動向を見極める必要があるが、もしかしたら 2012 年を先史編物研究の新たな画期とする見方もできるのかも知れない。

2) 編物資料の見方

研究史については、以上の通りである。続いて、資料の見方について述べることにしたい。

そもそも、本論で扱う編物とは何を指すのか、明確にしておきたい。筆者が編物と呼ぶのは、「細長い素材を組んだり絡めたり巻いたりして立体または平面を形成した器物」のことである。具体例を挙げれば、カゴ・編袋・籃胎漆器・釜・箕・敷物・編布・網などのことであり、他の研究者の「編物」〔小笠原 1983a〕・「編み物」〔野田 2005〕・「編組製品」〔名久井 1999、東京都立大学人類誌調査グループ 2002 ほか〕・「Basketry」〔額田 1966〕などとほぼ同じものである。ただし、筆者が編物と呼ぶものには、網・編布を含め、織物・縄類（縄・紐など）を含めないことを断っておく。

筆者は、「組む」・「絡める」・「巻き上げる」などをまとめて「編む」と捉え、編んだ物だから「編物」とする。送り仮名の付く「編み物」としないのは、「織物」の語と対比的に用いるという意図からである。また「編物」の語は、学史的（「編み物」を含め日本考古学において 1 世紀以上伝統的に使用されている）・埋蔵文化財行政的（『発掘調査のてびき』〔文化庁記念物課・奈良文化財研究所 2010〕で使用されている）・学際的（『文化人類学事典』〔吉本 1987〕で使用されている）・国際的（中国考古学・朝鮮考古学の発掘報告などで「竹編物」〔浙江省文物管理委员会 1960〕や「편물（編物）」〔任・李・金 2008〕の語が使用されている）に見ても、最もふさわしいものであると考える。近年、「編組製品」という語を使用する例が多く見られるようになったが、少なくとも考古学用語の「○○製品」は素材を冠するのが基本であり（土製品・石製品・植物製品・骨角製品・金属製品など）、「編組」という語を冠する

ことには違和感を禁じ得ない。すでに述べたように、筆者は「編む」の中に「組む」その他が含まれるとの考えから、「編組」という語そのものにも違和感を持っている²⁾。「編組製品」は、特定の伝統工芸や民俗例においてそれが選択されている場合に使用すべきものであって(用語の選択にも伝統的・民俗的意義がある)、過去の人々が残した遺物を合理的・客観的に評価すべき考古学には適さないように思われる。

この編物の考古資料は、カゴなどの実物資料と、土器器面の圧痕資料に二分される。

実物資料は、読んで字のごとく、カゴ・編袋・籃胎漆器・釜・箕・敷物・編布・網などの実物のことである。通常、有機質(植物質)の編物は地中にあると腐朽してしまうが、低湿地などの好条件下では遺存することがあり、当時の姿をありのままに知ることができる。直接資料[植松 1980]と言い換えることもでき、抽出可能な情報が最も多い。

圧痕資料は、土器底部の敷物圧痕³⁾(平底土器の底部に残される土器製作用敷物の圧痕)、組織痕土器(縄文時代晩期の九州地方に特徴的な、器面に編織物圧痕を有する土器)、カゴ型土器⁴⁾(弥生時代後期末～古墳時代後期に見られる、器面にカゴ圧痕を有する土器: 図4)などのことである。いずれも土器器面に編物の凹凸が残されたもので、当時の編物の一面を知ることができる。言わば間接資料[植松 1980]であり、残念ながら実物ほどの情報は得ることができない。しかし、無機質の土器器面に転写されることで腐朽の恐れがなくなり、その資料数は非常に豊富である。

これらの編物資料を見る上で、最も基本的で重要なのは、編み方(製作技法)・器種(形態および機能)・

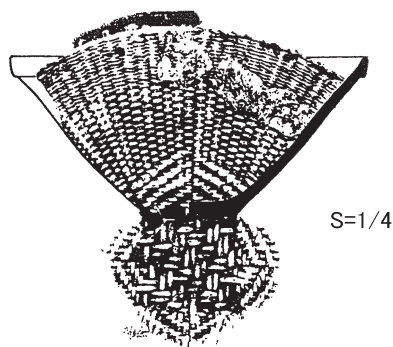


図4 カゴ型土器の一例(籠目土器)
※大阪府国府遺跡[末永 1935]

素材の三要素である。なぜならば、これらが互いに相関関係を持ちながら、一つの編物を成していると考えられるからである。それは、例えば石器の製作技法・器種・素材(石材)に明確な相関関係があるのと同じである。これら三要素に、各編物資料の出土状況や共伴遺物などの諸情報を加えることで、より深くその実態に迫ることができる。

それでは、各要素について詳しく述べていくことにしよう。まずは、三要素の中でも特に重視される編み方を見ていくことにする。

編み方(技法)については、先行研究の多くで扱われ、各地域・各時期にどのようなものがあるのか、長年検討されてきた。編物がその名の通り「編んだ物」である以上、これは当然のことである。しかし、研究者によって編み方の定義や表現に多少の違いがあり、しばしば議論の対象になっている。特に研究者間の違いが大きいのは、面を形成するための編み方であり、これについて筆者の考えを以下に示すことにしたい。

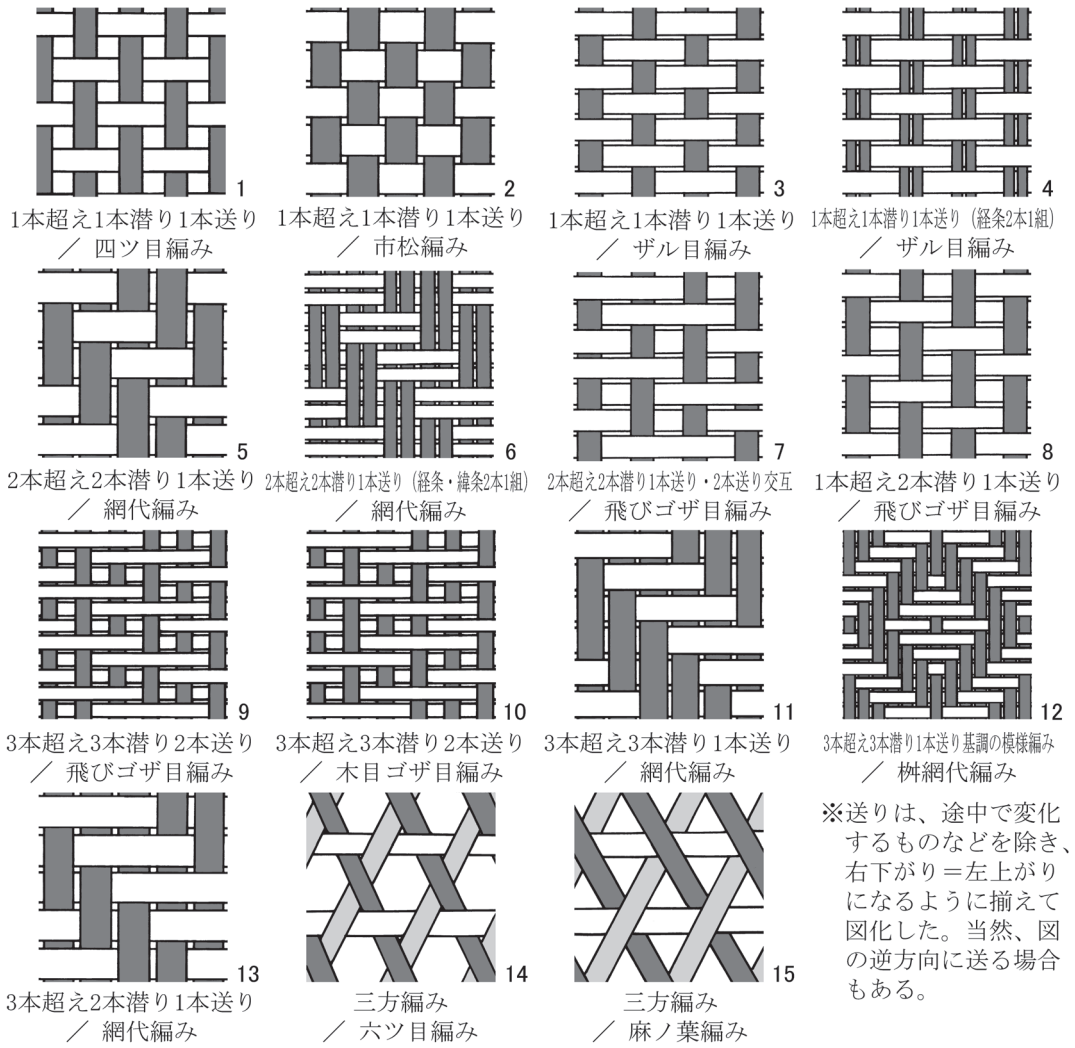
先行研究を踏まえて整理すると、面を形成するための編み方は「網代編み」(組む技法・組み編む技法)・「もじり編み」(絡める技法・絡め編む技法)・「巻き上げ編み」(巻き上げる技法・巻き編む技法)の三つに大別することができる。

網代編み

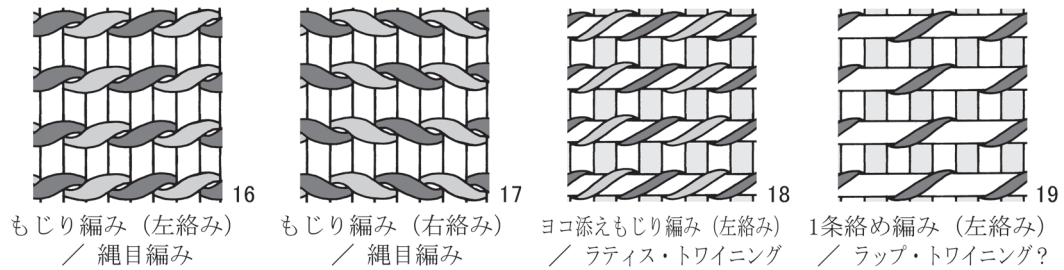
条材を縦・横・斜めに単純交差させる編み方を、日本考古学では伝統的に「網代編み」と呼ぶ(図5-1～15)。これは、名久井文明氏の「組む」[名久井 2004]、吉本忍氏の「交叉組織」に相当する[吉本 1987]。その組織は、経条・緯条を単純に組み編むもの(図5-1～11・13)を基本とするが、特に三方向の条材を組み編むものを「三方編み」(図5-14・15)と呼び、途中で調子を変えて何らかの模様(文様)を編み出したものを「模様編み」(図5-12)と呼ぶ。一部を除き、各緯条が経条を何本超え、何本潜り、経条何本分横に送って(ずれて)いくかによって組織構造を表現することができる(図6)。

この網代編みは、言わば「広義の網代編み」[柳原 2008]で、近現代民具の網代編み(=「狭義の網代編み」、経条・緯条が数本ずつ超え潜りするもの: 図5-5・6・11～13)よりも意味の幅が広い。日本考古学で網代編みと呼ぶものの中には、民具表現[大分

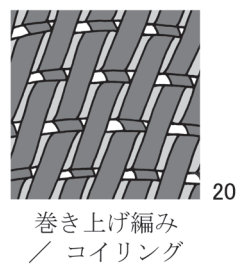
〈 広義の網代編み 〉



〈 広義のもじり編み 〉



〈 巻き上げ編み 〉



※各模式図の下には、その編み方の「考古学表現 / 民具表現その他」を示した。また各模式図は、主にカゴ類を想定して作成したが、器種によっては90°回転させて経条・緯条を逆転させた方が図として適切な場合もある。

図5 主な編み方の模式図 [松永 2013a]

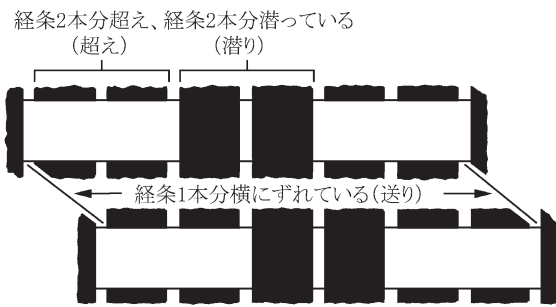


図6 超え・潜り・送りによる網代編み分類・表現方法 [松永 2003 を改変]

県別府産業工芸試験所 1991・1992] の「四ツ目編み」(経条・緯条が 1 本ずつ超え潜りするもの: 図 5-1)、「市松編み」(経条・緯条が 1 本ずつ超え潜りし、目が詰まるもの: 図 5-2)、「ザル目編み (ゴザ目編み)」(経条の間隔をあけて緯条が 1 本ずつ超え潜りするもの: 図 5-3・4)、「飛びゴザ目編み」(経条の間隔をあけて緯条が数本ずつ超え潜りするもの: 図 5-7 ~ 9)、「木目ゴザ目編み」(飛びゴザ目編みの変形で、送りの方向を変えてジグザグに編むもの: 図 5-10)、「六ツ目編み」(三方向の条材が交差して六角形の目を形成するもの: 図 5-14)、「麻ノ葉編み」(三方向の条材が交差して三角形の目を形成するもの: 図 5-15) など含まれるのである⁵⁾

この網代編みの類について筆者は、日本考古学伝統の、客観的数値で組織を表現できる超え・潜り・送りを基本としつつ、それに民具表現を適宜併記し、それでも表現できない場合は個別に表記するのが最善であると考えている。

ところで、近年編物資料の編み方に民具表現を主として用いる例が増えてきたが、これにはいくつかの問題がある。それらは主に、広義の網代編みに関わることなので、ここで指摘しておきたい。

一つは、民具表現の曖昧さである。現在は名久井文明氏が主張する『竹編組技術資料』[大分県別府産業工芸試験所 1991・1992] の編み方分類・表現に合わせるという考え [名久井 2004] が基本になっているが、実際の民具表現は同じ技法でも地域によって呼び方が変わったり、編み方の違いを個々が感覚によって捉えたりするところがある。それゆえ、場合によっては誤解を招いたり、基準が曖昧だったりする恐れがあるのである。図 7 は、市松編み・ザル目編み・四

ツ目編みの関係を示したものである。1 本超え 1 本潜り 1 本送りのうち、目が詰まったものが市松編み、一方の条材の間隔があいたものがザル目編み、目が詰まらないものが四ツ目編みなのだが、どれくらいの間隔であれば目が詰まったとするのか、どれくらいの間隔であれば間隔があいたとするのか、実は明確な基準が存在しないのである。図 8 は、網代編みと飛びゴザ目編みの関係を示したものであるが、経条の間隔をあけるものが飛びゴザ目編みであり、やはりどれくらいの間隔で網代編みとするのか、飛びゴザ目編みと呼ぶのか、明確な基準は存在しない。近現代民具の完形品ならば、ある程度間隔があいているか判断しやすいかもしれないが、潰れた状態で出土する先史編物の条材間隔が、元々どれくらいであったのか、不明確なことも多いのである。そのため現状では、それぞれの観察者が各人の感覚で間隔を判断しているのである⁶⁾。

もう一つの問題は、民具表現だけで編み方を捉えようとすると、超え・潜り・送りによって抽出される細かな違いを、一緒くたにしてしまうということである。図 9 は、民具表現で飛びゴザ目編みに分類される網

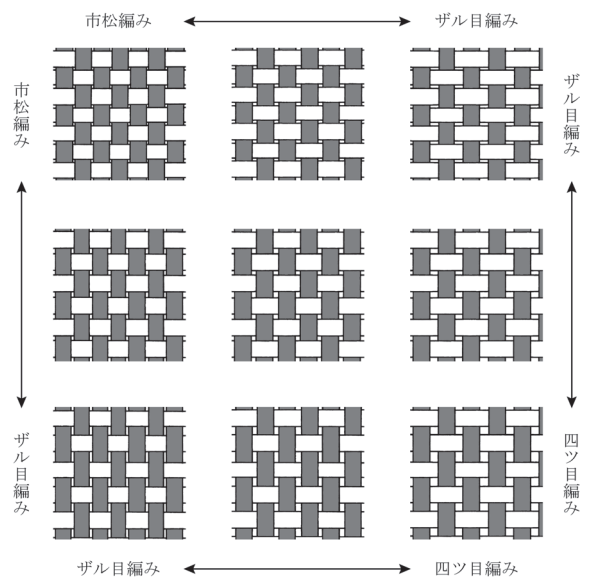


図7 市松編み・ザル目編み・四ツ目編みの関係

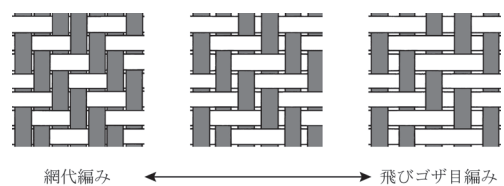


図8 網代編み・飛びゴザ目編みの関係

代圧痕の一部を示したものであるが、図 9-1 は縄文時代中期後半から後期前半を中心に東北地方南部および関東・甲信越地方で主体となる網代圧痕（1 本超え 2 本潜り 1 本送り⁷⁾、図 9-2 は縄文時代中期末から後期前葉を主として宮城県・福島県の一部で卓越する網代圧痕（4 本超え 2 本潜り 3 本送り）である。両者は、超え・潜り・送りで表現すると違いが明らかなのだが、民具表現で表すと全て飛びゴザ目編みの類になってしまうのである。図示はしなかったが、1 本超え 2 本潜り 1 本送りの発展形と考えられる 3 本超え 3 本潜り 2 本送りの民具表現では飛びゴザ目編みとなり⁸⁾、地域差や時期差が見出せなくなってしまうのである。

また、『竹編組技術資料』の呼称に基づくことにも、限界がある。なぜならば、硬質材であるタケササ類を用いた編物と、軟質材を用いた編物では技法に少なからず違いがあるからである。分かりやすいところでは、弥生時代に稲ワラの利用と関連して出現したとされる「巻き上げ編み」が、同書には出てこない。

ここで、さらに『竹編組技術資料』にない技法の一例を紹介することにしたい。

滋賀県甲賀市の水口地区に、「水口細工」と呼ばれる伝統工芸がある。具体的にはツツラフジやクスを用

いた編物なのだが、昭和 40 年代に一度廃れた後、近年地域の努力によって技術復元がなされた（柱状の経条：アオツツラフジ、扁平な緯条：クス）というものである〔田中 2014〕。この水口細工によく似た編物が、東アジア先史時代の考古資料に認められるのである。図 10 は、水口細工とそれに類似した編物資料（土器底部の敷物圧痕）を示したものであるが、柱状の経条に扁平な緯条を組み合わせる点が共通している。

この水口細工は、考古学の世界で全く知られていなかったものではない。杉山寿栄男氏の著書『日本原始繊維工芸史』土俗篇〔杉山 1942b〕に「水口編」・「防已編」として紹介されており、考古学における編物研究史を踏まえていけば、当然目に触れているはずのものである。筆者が敷物圧痕（網代圧痕）に見る「経条に柱状（円柱状）の材、緯条に扁平で太い材を用いるもの」を「ツツラフジやトウなどの編物に似ている」と考えた〔松永 2008・2013a〕のも、実はこの水口細工が根拠の一つである。厳密に素材を分析すれば全く同一のものではないのかもしれないが、素材の組み合わせ方は同じであり、大いに参考にすべきであろう。この水口細工類似資料については、『竹編組技術資料』では対応が難しい⁹⁾。これに対して何か民具呼称を設定するのであれば、「柱状の経条に扁平な緯条を組み合わせる手法」を、杉山寿栄男氏の「水口編」を活かして「水口編み」と呼称するのが良いだろうか。そして水口編み系統のヴァリエーションを、模様（文様）ごとに細分するのが適切なように思われる。

断っておくが、『竹編組技術資料』はきわめて優れた技術書である。各技法が模式図付きで詳細に解説されているだけでなく、書中の用語が絶対的なものではないことを明記している点でも実に有用である。しかし、あくまでも竹工芸の専門書であり、より柔軟な素材の編物全てに対応できるわけではないのである。

以上の問題の存在から、やはり網代編みの類の分類・表現には、客観的数値を基本とし、それに民具表現を適宜併記する（メインにしない）という形をとった方が適切であると考えられる。

もじり編み

一方の条材に別の条材を絡める編み方を、「もじり編み」と呼ぶ（図 5-16～19）。広義的には名久井文明氏の「編む」〔名久井 2004〕、吉本忍氏の「振り組織



図 9 飛びゴザ目編みの考古資料（敷物圧痕）
〔安孫子 1971、松岡 1981〕

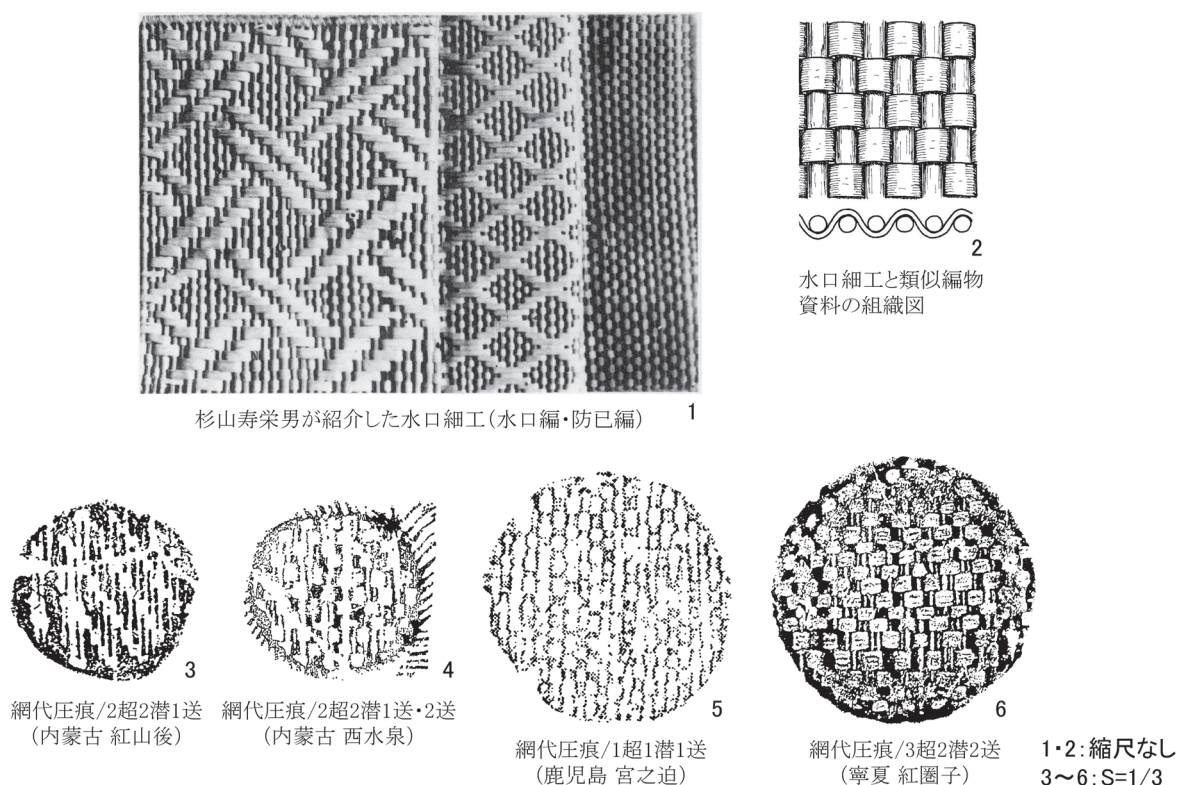


図10 水口細工とその類似資料 [固原県文管所・中国歴史博物館考古部 1993、杉山 1942b、中国社会科学院考古研究所内蒙古工作队 1982、長野・井ノ上 1981、濱田・水野 1938]

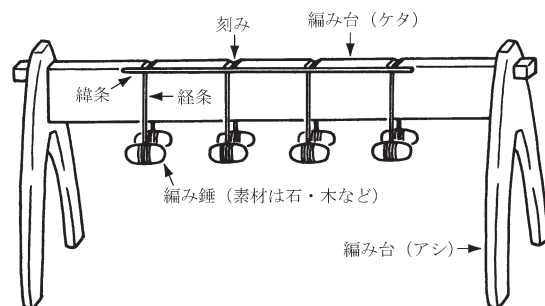
[吉本 1987] にほぼ相当する。典型的なもじり編み(一方の条材に別の条材を複数本1単位で絡めるもの)(図 5-16・17)は、民具表現では「縄目編み」・「双子編み」などとも呼ばれ、編み台・編み錘のセット(図 11)を用いて編む場合と、手のみで編む場合とがある。「広義のもじり編み」には、「ヨコ添えもじり編み」(経条・緯条を交差させ、それに別の条材を2本単位で絡め巻くもの:図 5-18)や「1条絡め編み」(経条・緯条を交差させ、それに別の条材を1本単位で絡め巻くもの:図 5-19)、「巻きつけ」(経条・緯条を交差させ、それに別の条材を巻きつけるもの)も含まれる。これら典型的なもじり編み以外の編み方(尾関清子氏の「絡み巻き」[尾関 2007])については、「絡め編み」または「絡め巻き編み」として総括することができよう。

なお、これら広義のもじり編みに見る絡め材の絡め方(巻きつけ方)には、縄の撚り方と同様に左右の別がある。その表現について様々な考え方があがるが、筆者は山本直人氏[山本 1986]や野田真弓氏[野田 2005]の左右(縄文原体の縄の撚り方向表現のL・

Rと同じ見方)に合わせて、「左絡み(左巻き)」(図 5-16・18・19)・「右絡み(右巻き)」(図 5-17)と見ることになっている¹⁰⁾。

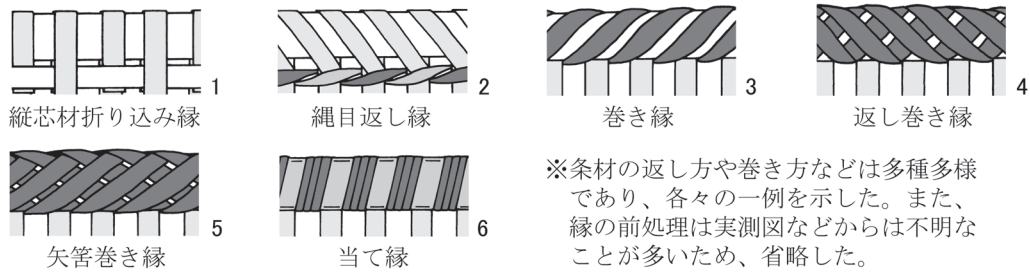
巻き上げ編み

渦巻状などの芯材を巻き材で巻き上げる編み方を、「巻き上げ編み」と呼ぶ(図 5-20)。概ね、吉本忍氏の「巻き組織」[吉本 1987]に相当するものである。この編み方は、日本列島では弥生時代以降に見られる



※ケタの刻みに引っかけた経条を、編み錘ごと前後させて、ケタに沿わせた緯条に絡めていく。経条を一通り絡めたら、次の緯条をケタに沿わせ、また編み錘を前後させて経条を絡めていく。以後、目的の器物の大きさ(広さ)になるまで同様の動作を繰り返す。

図11 編み台・編み錘の基本構造 [松永 2013a]



※条材の返し方や巻き方などは多種多様であり、各々の一例を示した。また、縁の前処理は実測図などからは不明なことが多いため、省略した。

図 12 主な口縁部処理方法（縁仕舞）の模式図 [松永 2013a]

技法のため、縄文時代編物の研究では位置付けがなされていない。「コイリング」・「絡み巻き上げ」・「巻き編み」などとも呼ばれ、特に「コイリング」が一般的である。しかし、「網代編み」や「もじり編み」に対し、この編み方だけがカタカナ英語というのも不自然なので、筆者は「巻き上げ編み」の語を用いるようにしている。

面形成以外の技法としては、口縁部の処理方法（縁仕舞）があるが、学史的に議論が浅く、特別な考古学用語は設定されていない。そのため、現状では『竹編組技術資料』に即した民具表現 [大分県別府産業工芸試験所 1991・1992、名久井 2004] を用いることが多い。主なものとしては、「縦芯材折り込み縁」（余剰の経条を折り返し、下段の緯条の間に差し込んでおさめる方法：図 12-1）、「縄目返し縁」（口縁部の手前にもじり編みを巡らせ、そこに余剰の経条を折り返して差し込む方法：図 12-2）、「巻き縁」（巻き材を巻きつけながら周回する方法：図 12-3）、「返し巻き縁」（巻き縁をおこなった後、逆方向に巻き材を巻きかぶせて周回する方法：図 12-4）、「矢筈巻き縁」（数本飛んでは数本巻き戻り、8 字状に巻きながら周回する方法：図 12-5）、「当て縁」（口縁部の内側・外側両方に縁材

を当てて挟み、その上から巻き材を巻きつける方法：図 12-6）などがある。

必要上、編み方についての話がかなり長くなってしまったが、引き続き残る二つの重要要素、器種と素材について述べさせてもらいたい。

器種については、実物資料の場合、立体的な編物と平面的な編物があり、両者とも個々の形態の特徴や出土状況などに基づいて様々な器種に分類される [松永 2013a]。立体的な編物にはカゴ(立体的な編物容器)・編袋(比較的柔軟な編物容器)・籃胎漆器(カゴに漆を塗布したもの)・筥(円筒形を呈する漁労用編物)・箕(穀物の選別などに用いる浅い編物)などがあり、平面的な編物には壁材(直立して壁を形成する編物)・敷物(下に敷くための平面的な編物)・編布(もじり編みで編んだ布)・網(魚を捕るための網)・魼(魚を捕るための柵状編物)・堰(水の流れをせき止めるための柵状編物)などがある(図 13)。

圧痕資料については、敷物圧痕・組織痕土器・カゴ型土器の各原体が、実物資料の器種にあたる。すなわち、敷物圧痕の原体は土器製作用の敷物、組織痕土器の原体は土器の型取り技法の型離れ材となった編布・網および型となったカゴ、カゴ型土器の原体は同じく

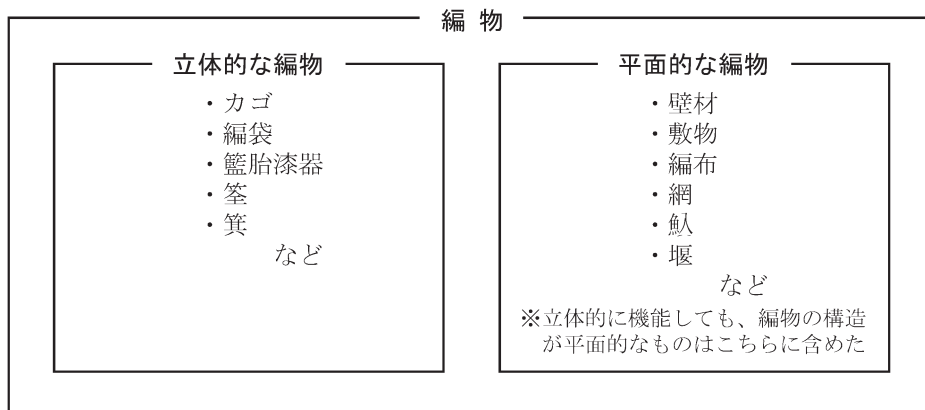


図 13 編物の主な器種 [松永 2013a]

土器の型取り技法の型となったカゴということになる。また器種とは別に、圧痕資料は各原体の編み方などから細分され、敷物圧痕には網代圧痕・もじり編み圧痕（スダレ状圧痕・編布圧痕・カゴ底圧痕・絡め編み圧痕）・巻き上げ圧痕、組織痕土器には網代圧痕・（手による）もじり編み圧痕・編布圧痕・網目圧痕といった各種がある¹¹⁾。

素材については、基本的に植物学的な素材同定の結果に従い、どの種の植物のどの部分がどのように用いられているかを見ることになる。特に編物の部位が分かる場合は、どの部位にどのような植物が用いられているか（部位による素材の使い分け）に注目することが大切である。たとえ植物学的な素材同定がおこなわれていなくても、素材の幅や断面形、節の有無、質感、加工方法などを詳しく観察して、各資料に使用されている素材の特徴を可能な限り抽出する。

編物資料を見る際には、以上のように編み方・器種・素材を分類・整理し、三要素の相関関係について検討することが基本となる。そして、すでに述べたように、これら三要素にさらなる諸情報（出土状況や共伴遺物など）を加えて、先史編物の実態復元につなげていくのである。

3. 日本列島の編物

先史編物研究の基本をおさえたところで、いよいよ東アジア先史時代の各種編物資料を具体的に見ていくことにしよう。まずは、日本列島先史時代（主に縄文時代・弥生時代）の編物資料を、時期順に見ていきたい。

1) 縄文時代

縄文時代草創期の編物

日本列島において、編物の存在が確認できるのは、縄文時代草創期からである。ただし、1万年以上前の編物が実物として遺存することはきわめて困難なため、現時点で確認できるのは土器底部の敷物圧痕のみである。

鹿児島県三角山 I 遺跡〔藤崎・中村 2006〕では、隆帯文土器の底部に広義のもじり編みに属する絡め編み圧痕が認められる。また埼玉県打越遺跡〔木村・中島 1988〕の爪形文土器や静岡県仲道 A 遺跡〔漆畑・澁谷ほか 1986〕の多縄文系土器の底部には、広義の網代編みに属する網代圧痕が認められる。

このように、該期の編物資料は少数の圧痕資料に限られるものの、広義の網代編み・広義のもじり編みの両系統がこの頃から存在し、それらによって作られた平面的な編物が土器製作用敷物として使用されていたことが分かる。その技術水準や類似資料（カゴに似た土器の存在）を見る限り、おそらくカゴなど立体的な編物も製作されていたのであろう。該期の日本列島にこれほどの技術があったのであれば、東アジアの編物の起源は後期旧石器時代にまで遡ると考えた方が自然である。

縄文時代早期の編物

縄文時代早期になると、実物資料・圧痕資料両方が確認できるようになる。

今のところ日本列島最古の実物資料は、滋賀県粟津湖底遺跡から出土した早期前葉のものである〔中川 2000〕。破片資料のため詳細は不明であるが、網代編みの類と見られるものと、カゴ類の口縁部（巻き縁？）の可能性のあるものが確認できる。

早期後半には、佐賀県東名遺跡〔西田 2008、西田・山田・佐々木 2009〕を筆頭に、いくつかの遺跡から良好な資料が見つまっている。それらを見ると、当時すでに立体的なカゴ類が高い完成度で製作されていたことや、広義の網代編み・もじり編みに含まれる基本的な技法がほとんど出揃っていたこと、装飾・文様効果のある編物が製作されていたこと、素材に木本類や蔓植物などを適宜選択していたことなどが分かる。

該期の圧痕資料は、網代圧痕が日本列島各地で散見されるとともに、九州地方ではもじり編み圧痕も認められる。草創期とは分布が異なるが、やはり広義の網代編み・もじり編みの編物が土器製作用敷物として使用されていたことが分かる。

縄文時代前期の編物

縄文時代前期には、実物・圧痕ともに資料が漸増し、編み方・器種・素材の相関関係や地域性が少しずつ浮かび上がってくる。

実物資料については、早期に認められた網代編み・もじり編みの各技法を用いて、様々なカゴ類などが製作・使用されている。また、出土遺跡の増加によって、この頃から編み方・器種・素材の三要素の相関関係や地域性が少し見えてくるようになる。具体的には、北

陸地方のもじり編みのカゴ類にヒノキの類が使用されていることや、九州地方の網代編みの編物にイヌビワが使用されていることが、他の時期と共通している。

圧痕資料については、土器の平底化と連動して敷物圧痕の資料が増加していく。その中で、広義の網代編み・もじり編みの資料が各地で見られるだけでなく、後につながる地域的特徴も認められるようになる。例えば東北地方では、多雪・寒冷地帯に分布する東北型網代圧痕（マタタビなどの蔓植物を素材にしたと見られる、ボコボコした質感の1本超え1本潜り1本送り）の初現的資料が認められる。また東北地方南部や関東地方では、縄文時代中期以降の東日本で主体となる2本超え1本潜り1本送り（民具表現の飛びゴザ目編みの類と見れば1本超え2本潜り1本送り）の網代圧痕が該期から存在する。さらに東北地方から北陸地方にかけての日本海側地域では、同地域で縄文時代中期前半に卓越するスタレ状圧痕が確認できる。

このように実物・圧痕ともに様々な地域性が浮かび上がる中、該期の編物について最も重要なことは、もじり編みの布、すなわち編布が出現することである。実物資料では青森県三内丸山遺跡〔岡田・中村・齋藤・小笠原ほか1998〕・山形県押出遺跡〔佐々木・佐藤ほか1990〕・鳥浜貝塚〔布目1987〕、圧痕資料では長野県市道遺跡〔中村2001〕に例があり、編み台・編み錘のセットを用いたもじり編みが、布製作に用いられるようになっていたことが分かる。

縄文時代中期・後期の編物¹²⁾

縄文時代中期になると、資料がかなり充実して、様々なことが分かるようになる。そして後期には、実物・圧痕ともに資料が数量的なピークを迎え、豊富な情報から三要素の相関関係や地域性を明確に知ることができるようになる。

縄文時代中期から後期にかけての実物資料を見ると、各技法を広範に応用しながら、カゴや編袋、敷物・編布・舻などの各種編物が製作・使用されている。三要素の相関関係の具体例については、北海道地方・北陸地方でもじり編みのカゴ類などにカエデ属が使用されていること、関東地方を中心とする東日本や沖縄地方で広義の網代編みのカゴ類などにタケササ類が使用されていること、北陸地方の網代編み・もじり編みのカゴ類などにマタタビ属が使用されていること、北陸

地方から山陰地方にかけて広義のもじり編みのカゴ類などに針葉樹が使用されていること、四国地方・九州地方の網代編みの編物にイヌビワ属が使用されていること、九州地方のもじり編みのカゴ類にカズラ類のような蔓植物が使用されていること、もじり編みの編布にアカソが使用されていることなどが挙げられる。

圧痕資料についても、縄文時代中期から後期にかけての資料が非常に多く、様々な地域的特徴（図14）が明確になる。こちらの具体例としては、東北地方や北陸地方など日本海側を中心とした地域で東北型網代圧痕（特に東北地方北部）やスタレ状圧痕（特に中期前半）が特徴的に見られること、東北地方南部および関東・甲信越地方で中期後半から後期前半を中心に2本超え1本潜り1本送りの網代圧痕（素材はタケササ類など）が主体となること、宮城県および福島県の一部で中期末から後期前葉を主として4本超え2本潜り3本送りの網代圧痕が卓越すること、北陸・東海地方から中国・四国地方にかけての西日本で後期前半を中心として（北陸地方では中期以来）2本超え2本潜り1本送りや1本超え1本潜り1本送りの網代圧痕がよく見られること、岐阜県山地部で中期後半から後期前半にかけて2本超え2本潜りで1本送りと2本送りを繰り返す網代圧痕が卓越すること、九州地方南部で後期前半に1本超え1本潜り1本送りの網代圧痕（水口細工類似資料を含む、素材は蔓植物など）が主体となることなどが挙げられる。特に、東日本の2本超え1本潜り1本送りの網代圧痕については、後期に圧倒的多数を占めており、当時・該地の土器製作敷物に2本超え1本潜り1本送りの網代編みの編物を使用するという規範が存在した可能性が高い。その一方で、2本超え2本潜り1本送りや1本超え1本潜り1本送りの網代圧痕は、素材などを無視すれば、網状葉脈圧痕とともにほぼ全国で見られることから、この種の網代編みの編物が土器製作の敷物として最も基本的なものだったと考えられる。

いずれにせよ縄文時代中期から後期にかけての日本列島では、各地域で入手可能な素材を用いて、様々な土器製作の敷物を製作・使用していたことが推測される。

縄文時代晩期の編物

縄文時代晩期にも、三要素が地域ごとに相関関係を

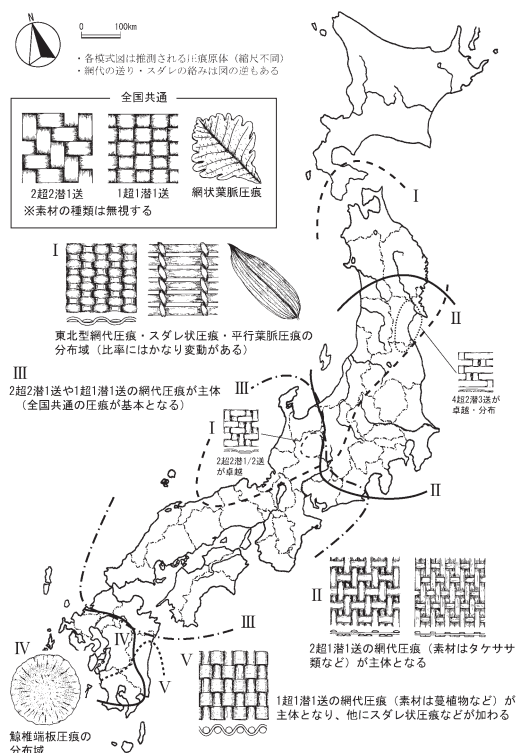


図 14 縄文時代中期後葉～後期前半の「敷物圧痕」に見る地域性 [松永 2008b を改変]

持ち、編物が様々な場所・用途に使用されていたことに変わりないようである。

実物資料を見ると、東日本の広義の網代編みのカゴ類にタケササ類が使用されていること、概ね北陸地方から山陰地方のもじり編みのカゴ類などに針葉樹が使用されていること、北陸地方のもじり編みの編物にマタタビ属が使用されていること、編布にカラムシやアカソといったイラクサ科植物が使用されていることなどが確認できる。

該期ならではの特徴としては、当時の漆工芸との関係が指摘できる。東北地方・亀ヶ岡文化圏を中心に、北は北海道、南は北陸地方・東海地方まで、カゴに漆を塗布した籃胎漆器が多数出土しているのである。祭祀的な性格も想定できるこの特殊なカゴ類は、タケササ類を素材として、広義の網代編み（体部：ザル目編みの類、底部：狭義の網代編み）で編んだものである。また漆漉し布に使用された編布も、この時期に目立ち、当時の漆工芸の卓越に編物が関わっていたことを示している。

圧痕資料については、日本列島全体として敷物圧痕

自体の数が減少傾向となる上、各地で編物圧痕よりも葉脈圧痕の割合が増えていく。しかし、それでも網代圧痕やもじり編み圧痕は地域によってはよく見られ、縄文時代後期以前と共通点も少なくない（東日本の2本超え1本潜り1本送りの網代圧痕、多雪・寒冷地帯の東北型網代圧痕、北陸地方のスタレ状圧痕など）。

また九州地方では、該期に限って組織痕土器が特徴的に見られ、土器の型取り技法にも様々な編物（網代編み・もじり編みのカゴ、編布、網）が使用されていたことが知られる。

2) 弥生時代

弥生時代前期の編物

弥生時代に入って、日本列島の編物文化の様相が大きく変わる。もちろん縄文時代との共通点もあるが、縄文時代に見られた編物が消えていく一方で、大陸文化の影響を受けたと見られる新技法や新器種が登場するのである。

特に明瞭なのが実物資料の変化で、縄文時代晩期に卓越していた籃胎漆器や編布が衰退・激減し、その一方で巻き上げ編みの編物と箕が出現する。籃胎漆器の衰退は弥生時代における漆工文化の衰退が、編布の激減は機織技術の導入（編布から織布への移行）がそれぞれ関わっているのであろう。また巻き上げ編みと箕の出現は、稲作の伝来が関わっている可能性がある [渡辺 1994]。これらの変化に伴って、新たな編み方・器種・素材の相関関係も生まれており、巻き上げ編みの編物にアケビ属が使用されていること、東海地方の広義の網代編みおよびヨコ添えもじり編みのカゴ類にタケササ類が使用されていること、山陰地方の広義の網代編みおよびヨコ添えもじり編みのカゴ類にマタタビが使用されていることなどが指摘できる。なお、(縄文時代に多い) 貯蔵穴からの実物出土例が一気に減ることも、縄文時代から弥生時代への生活文化の変化に起因するものとして注目される。

圧痕資料については、かなりの減少傾向の中、東日本で各種網代圧痕が確認できる。弥生時代に入っても、引き続き網代編みの敷物が土器製作に使用されていたようである。ただし、弥生時代には編物圧痕以外の敷物圧痕（織物圧痕・網状葉脈圧痕）が目立ちはじめる。これは、縄文時代と弥生時代の土器製作技術・編織技術の違いが敷物圧痕に反映されたものと見られる。

そのほか、壺形土器をカゴで包む例（被籠土器）が見られることも、弥生時代以降（古墳時代まで）の特徴である〔植松 1980〕。

弥生時代中期の編物

続く弥生時代中期には、西日本を中心とする各地でカゴの定型化が進むことが大きな特徴である。概ね口縁部を巻き縁または矢筈巻き縁とし、口縁部付近や体部中央などをヨコ添えもじり編み、体部を 1 本超え 1 本潜り 1 本送り（ザル目編み）や 2 本超え 2 本潜り 1 本送り（網代編み・飛びゴザ目編み・木目ゴザ目編み）で構成、底部を経条・緯条 2 本 1 組の 2 本超え 2 本潜り 1 本送らないし 1 本超え 1 本潜り 1 本送りとする鉢形のカゴ類の実物資料が、西日本などに共通して見られるようになるのである（編み方のパターンや補強材（親骨）の入れ方、サイズの大小などに個体差はある）。おそらく、当時のカゴの製作には、何らかの共通規範・共通理解があったのであろう。

それ以外の特徴的な実物資料としては、網代編みの編物を配した堰が挙げられる。管見に触れたのは東日本の例であるが、縄文時代の魎（編み方はもじり編み・巻きつけ）のように、弥生時代にも巨大な構造物として編物が用いられていたようである。

編み方・器種・素材の相関関係については、あまり明確ではないが、山陰地方の定型化したカゴにマタタビが使用されていることや、東海地方の網代編みのカゴにタケササ類と推定される素材が使用されていること、各地の網代編みの敷物（の可能性のある編物）に経条・緯条 4 本以上 1 組にした条材が使用されていることが指摘できようか。

圧痕資料は、東日本（特に太平洋側）で織物圧痕と網状葉脈圧痕が代表的な敷物圧痕となる一方で、地域によっては網代圧痕やもじり編み圧痕も認められる。その中には東日本の 2 本超え 1 本潜り 1 本送りの網代圧痕や北陸地方のスタレ状圧痕といった縄文時代に通じるものも含まれる。さらに特筆すべきは、福島県龍門寺遺跡〔渡辺 1985a〕に編布圧痕が見られることで、弥生時代に編布が完全に廃れたわけではなく、機織技術導入後もわずかながら製作・使用されていたことが分かる。

弥生時代後期の編物

弥生時代後期においても、実物資料には巻き上げ編みや箕、定型カゴといった前期・中期同様の特徴が認められる。特に、カゴの定型化はより顕著になっており、弥生時代後期末以降に見られるカゴ型土器の型にも、同様の基本構成を持つ浅鉢形のカゴが使用されている。このカゴ型土器は、古墳時代にも受け継がれ、同後期まで製作・使用され続ける。

編み方・器種・素材の相関関係については、北陸地方および山陰地方の定型カゴにマタタビが使用されていることや、各地の網代編みの敷物（の可能性のある編物）に経条・緯条 5 本以上 1 組の条材が使用されていることが指摘できる程度である。ただし、石川県白江梯川遺跡〔久田・中川・本田・佐々木 2008〕から出土した定型カゴは、マタタビではなく針葉樹を素材としており、編み方などの基本構成が定型化しても、素材は必ずしも決まっていなかった可能性がある。

弥生時代後期の敷物圧痕は、弥生時代中期と共通点が多く、各地で網状葉脈圧痕が分布し、地域によっては網代圧痕や織物圧痕が見られるという状況を示す。しかし、編物圧痕はきわめて少なく、編物を土器製作敷物に使用する必要性がかなり低くなったことが推測される。土器製作における敷物の必要性は古墳時代以降一層低くなり、網代圧痕に代わって敷物圧痕の主流になった網状葉脈圧痕も、やがて糸切り底などに取って代わられる。

4. 中国大陸の編物

続いて、中国大陸の資料を時期順に見ることにしよう。該地の資料の基本的な特徴として、北の地域では圧痕資料（敷物圧痕）、南の地域では実物資料が主となることが挙げられる。

1) 中国新石器時代

中国新石器時代前期の編物

中国大陸で編物資料が確認できるのは、新石器時代前期からである。それは、長江下流域の跨湖橋文化に属する浙江省跨湖橋遺跡〔浙江省文物考古研究所・蕭山博物館 2004〕と、長江中流域の彭頭山文化に属する湖南省八十垱遺跡〔湖南省文物考古研究所 2006〕から出土した実物資料で、いずれも編み方は広義の網代編みである。ほとんどが敷物であるが、跨湖橋遺跡

では箕の可能性のあるものも見つかっており、広義の網代編みを用いて、平面的な編物・立体的な編物の両方が製作・使用されていたことが分かる。

一方、圧痕資料は、新石器時代前期後半にわずかではあるが敷物圧痕が見られる。河北省磁山遺跡〔渡辺1995〕でスダレ状圧痕と編布圧痕が、河南省賈湖遺跡〔河南省文物考古研究所1999〕で2本超え2本潜り1本送りの網代圧痕と編布圧痕が認められる。中国大陸でも早くから、網代編み・もじり編みの編物が土器製作用敷物に使用されていたようである。注目すべきは編布圧痕が日本列島よりも早く出現していることで、磁山遺跡の資料の中にはすでに織布への技術的転換を示唆するものも認められるほどである。

中国新石器時代中期の編物

新石器時代中期には、長江下流域で馬家浜文化および河姆渡文化に属する実物資料が見られる。該期・該地においても、(前期と全く同じ編み方というわけではないが) 広義の網代編みによる編物が製作・使用されており、中には馬家浜文化・河姆渡文化に共通して見られる編物も存在する。具体的には、両文化において経条・緯条4～8本1組の網代編みが敷物または壁材の可能性のある編物に用いられ、それらのほとんどが未同定ながらアシとされるような似た植物を素材としているのである。これは、日本列島ほど明確ではないが、中国大陸における編み方・器種・素材の相関関係の一例と言えよう。

なお、該期の中国大陸には編物だけでなく、すでに織物も存在していることも、編物のあり方を考える上で忘れてはならない。馬家浜文化の江蘇省草鞋山遺跡〔南京博物院1980〕で、各種編物とともに、クズの織物が出土している。

圧痕資料は、華北地方や東北地方といった各地の諸文化(北辛文化、仰韶文化、紅山文化)に多くの敷物圧痕が認められる。ただし、編布圧痕が比較的目立った前期とは異なり、該期の主流は網代圧痕である。2本超え2本潜り1本送りの類や1本超え1本潜り1本送りの類など様々な種類の網代圧痕が見られるが、その素材には明らかな地域性が認められる。北に向かうほど「経条に柱状の材、緯条に扁平で太い材を用いるもの」(水口細工類似資料、素材は蔓植物や草本類か)が多く、南に向かうほど「経条・緯条に扁平で太

い材を用いるもの」(素材はタケササ類か)が多くなるのである。さらに網代圧痕以外にも、少数ながら編布圧痕や巻き上げ圧痕も認められ、日本列島よりもかなり早く網代編み・もじり編み・巻き上げ編みが出揃っていたことが分かる。編物圧痕以外では、仰韶文化の土器に織物圧痕が網代圧痕ほどではないが多く見られ、中国大陸ではこの頃から布の主流が編布から織布に移ったことがうかがわれる。

中国新石器時代後期の編物

中国新石器時代後期には、長江下流域で良渚文化に属する実物資料が多数見つかっている。かなり多くの編み方・器種があったようであるが、基本は広義の網代編みである。該期に認められる編み方・器種・素材の相関関係としては、広義の網代編みのカゴにタケのような植物が使用されていることが指摘できる。編物以外に特筆すべきは、該期に絹織物が認められることであり、編物・織物ともに中期よりも一層技術発展したことがうかがわれる。

圧痕資料については、華北地方を主とする各地の諸文化(大汶口文化、竜山文化、仰韶文化大司空類型・西王村類型、常山下層文化紅圈子類型、馬家窯文化半山類型・馬廠類型、後沙湾類型、木城馬鞍山類型)に多くの敷物圧痕が認められる。ただし大汶口文化や竜山文化では、ほとんどが織物圧痕であり、編物圧痕はそれ以外の文化で主体的に見られる。その編物圧痕とは網代圧痕のみであるが、2本超え2本潜り1本送りと1本超え1本潜り1本送りの類が多く、素材には新石器時代中期と同様の傾向が認められる。なお該期よりも後になると、土器製作用敷物の必要性は低くなっていき、敷物圧痕はほとんど見られなくなる。そして、ロクロ成形に伴う糸切り底などに移行していく。この流れは、日本列島では古墳時代以降に見られるが、中国大陸ではそれよりもかなり早い変遷を見せる。

2) 中国初期青銅器時代

初期青銅器時代については、長江下流域の馬橋文化に属する実物資料が知られる。該期においても、実物資料に見られるのは広義の網代編みである。編み方・器種・素材の相関関係についても、広義の網代編みのカゴ類にタケのような植物が使用されていることや、経条・緯条4本1組の網代編みの敷物にアシのよう

な植物が使用されていることが確認でき、基本的に新石器時代と変わらない編物が製作・使用されていたようである。

5. 朝鮮半島の編物

朝鮮半島については、今のところ日本列島・中国大陸ほどの良好な資料に恵まれていない。そのため実物資料・圧痕資料ともに、地域差・時期差などを抽出できる状況ではないが、わずかな手がかりからその一端をうかがい知ることは可能である。

実物資料については、慶尚南道飛鳳里遺跡〔任・李・金 2008〕の例が知られる。新石器時代前期後半に属する貯蔵穴から出土した編袋で、編み方はもじり編み、素材はアシと推定されている。

圧痕資料については、先史時代に属する編物圧痕は確認できず、土器底部の敷物圧痕として新石器時代や無文土器時代に網状葉脈圧痕が見られるのみである。ただし、歴史時代のものとして平壤直轄市楽浪土城址〔谷 1986〕の土器底部に網代圧痕が残されており、網状葉脈圧痕の存在（新石器時代に敷物を敷く行為があった証拠）も合わせれば先史時代の編物圧痕が見つかる可能性も否定できない。

つまり現時点では、朝鮮半島新石器時代に立体的なもじり編みの編物が製作・使用されていたことだけが確実であり、あとは平面的な編物や網代編みの存在が推測されるのみである。

6. まとめにかえて

これまで、東アジア各地の先史時代の編物を見てきたが、それを図化したものが図 15 である。

東アジア先史時代の編物文化は、かなり古くから広義の網代編みまたはもじり編みを軸にする点で共通するが、編布の出現・衰退や巻き上げ編みの出現、土器製作用敷物の出現・衰退の時期などは地域によってかなり異なることが分かる（特に日本列島と中国大陸）。また藍胎漆器や組織痕土器、弥生時代の定型カゴのように、ある地域・時期に特化した事象も少なからず認められる。

これら編物に見る地域差・時期差は、編織技術・土器製作技術・漆工技術・生活文化における発展・変化・影響の違いや、当時の環境（主に植生）の違いなどを背景にしているものと推測される。

本論は、筆者の課程博士論文〔松永 2013a〕の成果に最新の知見を加え、東アジア的視点・総合的視点からの概論として作成（旧稿の再構成を含む）したものである。集成データなどの詳細は、数年経ってはいないが、課程博士論文を見ていただきたい。

近年、日本考古学における先史編物研究の動向を見ると、植物考古学的研究と民俗考古学的研究の二つが強調されるようになってきている。いずれも非常に重要な研究なのであるが、その一方でそれらの新しい成果に目を奪われがちになり、本来の考古学における編物研究の姿勢や先人が残した業績が軽視されているような印象を受けるようになった。そのためか、残念なことに出土編物資料に対する誤解も増えてきたようである。

また、アジアを意識した知見が示されることはあるものの、実際にアジア（特に東アジア）の出土資料を扱った論考がほとんど出てこないまま、日本列島内での議論に終始しているのが現状である。






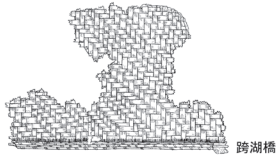


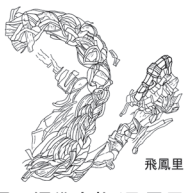

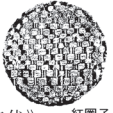


かねてより筆者は、東アジア的視点・総合的視点から各種編物資料を捉えるべきであることを主張してきた。本論は、そのような立場からの一つの見解であり、拙稿を読んで下さった方々に少しでも何かを汲み取って頂ければ幸いである。

謝辞

筆者は、2004 年の 30 周年記念号に、金沢大学大学院の修士論文の一部を再構成した「東アジア先史土器の「敷物圧痕」分類について」〔松永 2004〕を掲載して頂きました。それから 10 年経った本論の基礎となっているのは、名古屋大学大学院の課程博士論文「東アジア先史時代の植物質編物の研究」〔松永 2013a〕ですが、その中には金沢大学在学中に学んだことも多く含まれています。

この 10 年の間、金沢大学の中村慎一先生、名古屋大学の山本直人先生をはじめ、金沢大学の佐々木達夫先生・高濱秀先生、名古屋大学の梶原義実先生・伊藤伸幸先生には大変お世話になりました。筆者がささやかながらも研究を続けることができていたのは、先生方のご指導のおかげです。また、先生方以外にも、平素より様々な方々・機関からご指導・ご助力・ご協力・ご配慮いただいております。

最後に、不出来な卒業生に私見発表の場を与えていただいた、足立拓朗先生をはじめ、現金沢大学考古学研究室の皆様にご心より感謝申し上げます。

年代calBC	日本列島	中国大陸	朝鮮半島
13000	《縄文時代草創期》 		
12000	絡め編み圧痕(三角山 I) 		
11000			
10000	網代圧痕(打越)  網代圧痕(仲道A)  《縄文時代早期》	《新石器時代前期》	《新石器時代早期》
9000			
8000	網代編み実物(粟津湖底) 		
7000	 東名	 跨湖橋	
6000	網代編み・もじり編みカゴ実物(東名)  《縄文時代前期》	網代編み実物(長江流域) 網代圧痕・編布圧痕ほか(磁山・賈湖) ★一部疑似平織(磁山)	《新石器時代前期》
5000	編布実物(三内丸山ほか) 編物圧痕の漸増	《新石器時代中期》 網代編み敷物実物ほか(長江下流域) 網代圧痕・編布圧痕・巻き上げ圧痕 (華北地方・東北地方) ★織物実物(草鞋山)  織物圧痕(仰韶文化)	 飛鳳里
4000	編布圧痕(市道)  三内丸山	《新石器時代後期》 多様な網代編み実物(長江下流域) 網代圧痕(華北地方・華南地方) ★絹織物実物(銭山漾)  織物圧痕(山東地域)	もじり編み編袋実物(飛鳳里) 《新石器時代中期》
3000	《縄文時代後期》	《初期青銅器時代》 新石器時代を継承したカゴ・敷物実物 (長江下流域)  《殷》 《西周》 《春秋時代》	《新石器時代後期》
2000	編物実物・圧痕ともに数量的ピーク、 各地域で多様な編み方・器種・素材	《新石器時代後期》	
1000	《縄文時代晩期》 藍胎漆器・漆漉し編布の卓越(東北 地方ほか)→弥生期衰退 ★機織技術の 《弥生時代前期》 導入 巻き上げ編みカゴ実物・箕実物 《弥生時代中期》	《戦国時代》 《秦》《前漢》 《新》《後漢》	《無文土器時代前期》 《無文土器時代中期》 《無文土器時代後期》 《原三国時代》
B.C.	カゴの定型化(西日本)★織物圧痕の増加 《弥生時代後期》 編物圧痕の激減		網代圧痕(楽浪土城)  楽浪土城

※()内には該当する遺跡名・地名・地域名・文化名のいずれかを示した。また、織物に関する事象を★で示した。

図 15 東アジア先史時代における編物の変遷 [松永 2013a]

註

- 1) 角山幸洋氏の研究の特色として、編布の製作技法をニュージーランドのマオリ族と同様のもの（「経糸を上下2本の横木で固定し緯糸2本を組にして、右あるいは左か一方に捻りながら編む技法」として復元していることが挙げられる。
- 2) 現代において「編組」という語は、組紐状の絶縁被覆や軍事上の部隊編成にも使用されており〔新村ほか2008〕、必ずしもカゴ類などの技法を指すものではないことも注意する必要がある。一方、「編物」の語には、棒針編みや鉤針編みなどによって作られたものを想像しがちであるという短所があるが、それらも含めて「編物」なのであり、「編組」や「編組製品」ほどの大きな不整合性はない。
- 3) 筆者は2003年以来、仮称として括弧書きの「敷物圧痕」の語を用いてきた。しかし、10年以上経ってもこれより良い語が見つからず、またこの語を設定した意義も少しは伝わってきたようなので、今後は括弧書きを外すことにする。
- 4) 本論では「カゴ型土器」として一括するが、鐘方正樹氏・角南聡一郎氏は、この種の有圧痕土器を「籠目土器」（土器外面にカゴ圧痕が残されるもの）・「笥形土製品」（土器内外両面にカゴ圧痕が残されるもの）に二分している〔鐘方・角南1997〕。
- 5) 『竹編組技術資料』〔大分県別府産業工芸試験所1991・1992〕では、本論とは異なり「四つ目編み」・「ざる目編み」・「ござ目編み」・「六つ目編み」・「麻の葉編み」が漢字とひらがなで表記されている。しかし筆者は、民具呼称を強調するために、「編み」の前の語を漢字とカタカナにした「四つ目編み」・「ザル目編み」・「ゴザ目編み」・「六つ目編み」・「麻ノ葉編み」と表記することにしている。ただし、これらから派生した編み方にさらに付く語については、派生的・応用的であることを逆に強調するため、漢字とひらがなで表記している（「飛びゴザ目編み」や「木目ゴザ目編み」など）。また、経条の間隔をあけたものを指す「ザル目編み」・「ゴザ目編み」については、最も単純なもの（1本超え1本潜り1本送りの類）はより一般的な「ザル目編み」としているが、派生的・応用的なものについては「ザル目編み」と呼ぶことがほとんどないため、「飛びゴザ目編み」・「木目ゴザ目編み」のように「ゴザ目編み」を用いている。さらに、「麻ノ葉編み」の類については、現時点では資料が少なく細分してもあまり意味がないため、「麻ノ葉つぶし」や「麻ノ葉崩し」などの応用的なものも一括して「麻ノ葉編み」としている〔松永2013a〕。

- 6) 筆者も民具表現を併記する際には、仕方なく自身の感覚によって判断している。現状ではそうせざるを得ないが、今後何らかの解決法を模索したい。
- 7) 従来の考古学では、2本超え1本潜り1本送りとしてきたものであるが、ここでは飛びゴザ目編みの類として扱うために90°回転させて1本超え2本潜り1本送りとした。
- 8) 縄文時代晩期（末頃か）の東日本で、3本超え3本潜り2本送りの飛びゴザ目編みが、さらに3本超え3本潜り2本送り基調の木目ゴザ目編みに発展していく可能性がある〔松永2010〕。
- 9) 富山孝一氏は、水口細工に類似した網代圧痕を飛びゴザ目編み・木目ゴザ目編みの類に分類しているようであるが〔富山2012〕、筆者の感覚ではゴザ目編みとは言い難い。
- 10) この左右は、現代繊維工芸の左右とは逆であることを注意されたい（本論・縄文原体の左・L＝現代繊維工芸の右・S、本論・縄文原体の右・R＝現代繊維工芸の左・Z）。
- 11) 敷物圧痕・組織痕土器ともに、編物以外の原体による圧痕も存在する（敷物圧痕：織物圧痕・葉脈圧痕・ホタテ貝圧痕・鯨椎端板圧痕など、組織痕土器：平織圧痕）。
- 12) 実物資料・圧痕資料ともに、縄文時代中期から後期にまたがる資料が多いことから、ここでは一括して記述することにした。

参考文献

- 秋田かな子 1990「土器底部の輪積み技法」『東海大学校地内遺跡調査団報告』1, 150-165頁.
- 秋田かな子 2006『第14回足もとに眠る歴史展 縄文土器の作られ方』.
- 秋田かな子 2008「土器の外底面圧痕と製作技術」『縄文時代の考古学』7, 63-71頁.
- あみもの研究会 2012『シンポジウム 縄文時代の編組製品研究の到達点』.
- 荒木ヨシ 1968「縄文式時代の網代編み」『物質文化』No.12, 20-26頁.
- 荒木ヨシ 1970「東日本縄文時代後・晩期の網代編みについて」『物質文化』No.15, 12-18頁.
- 荒木ヨシ 1971「縄文式時代の網代編み」『物質文化』No.17, 29-40頁.
- 荒木ヨシ 1995「縄文時代に於ける分業の一考察」『物質文化』No.58, 1-19頁.
- 安孫子昭二 1971「網代底について」『平尾遺跡調査報告I』172-174頁.
- 安藤広道 2005「縄文時代・弥生時代の繊維製品」『季刊

- 考古学』第91号 65-69頁.
- 伊東信雄 1966「縄文時代の布」『文化』第30巻第1号 1-20頁.
- 植松なおみ 1980「古代遺跡出土カゴ類の基礎的研究」『物質文化』No.35, 20-35頁.
- 植松なおみ 1981「東北型網代圧痕について」『古代文化』第33巻第2号 17-26頁.
- 漆畑稔・澁谷昌彦ほか 1986『仲道A遺跡』大仁町教育委員会.
- 大分県別府産業工芸試験所 1991『竹編組技術資料』基礎技術編.
- 大分県別府産業工芸試験所 1992『竹編組技術資料』応用技術編.
- 大脇直泰 1961「押圧文土器について」『古代学』第9巻 132-141頁.
- 小笠原好彦 1970「縄文・弥生式時代の布」『考古学研究』第17巻第3号 29-49頁.
- 小笠原好彦 1983a「編物・布」『縄文文化の研究』第7巻 293-304頁.
- 小笠原好彦 1983b「縄文～古墳時代の布」『季刊考古学』第5号 35-39頁.
- 岡田康博・中村美杉・齋藤岳・小笠原雅行ほか 1998『三内丸山遺跡IX』青森県教育委員会.
- 岡元満子 1986「底部に圧痕を有する縄文式土器について」『鹿大考古』5, 91-125頁.
- 尾関清子 1996『縄文の衣』学生社.
- 尾関清子 2007「縄文時代草創期・早期の土器底部圧痕について」『考古学ジャーナル』No.565, 28-33頁.
- 尾関清子 2012『縄文の布』雄山閣.
- 鏡山猛 1961a「原生期の織布(上)」『史淵』第84輯 39-70頁.
- 鏡山猛 1961b「原生期の織布(中)」『史淵』第86輯 25-50頁.
- 鏡山猛 1962「原生期の織布(下)」『史淵』第89輯 27-43頁.
- 鏡山猛 1972「原生期の織布」『九州考古学論攷』413-485頁.
- 賀川光夫 1988「中国長江流域にみる編物(網代)について」『曾畑』274-281頁.
- 河南省文物考古研究所 1999『舞陽賈湖』科学出版社.
- 鐘方正樹・角南聡一郎 1997「籠目土器と笄形土製品」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要』1-15頁.
- 川端敦子 1983「底部圧痕に関する基礎的報告」『北陸の考古学』219-232頁.
- 北田勲・平野祐 2007「県内出土土器底部にみられる網代痕跡」『岩手県における縄文文化の諸相 資料集』37-42頁.
- 木村俊彦・中島宏 1988「埼玉県滑川町打越遺跡の発掘調査」『日本考古学協会第54回総会研究発表要旨』22-23頁.
- 黒沼保子 2009「編組製品における木本割裂き材の利用について」『奈良教育大学学術リポジトリ』NEAR (<http://hdl.handle.net/10105/914>).
- 固原県文管所・中国歴史博物館考古部 1993「寧夏固原県紅圈子新石器時代墓地調査簡報」『考古』1993年第2期 103-116・175頁.
- 湖南省文物考古研究所 2006『彭頭山与八十垱』科学出版社.
- 小林和貴・鈴木三男 2014「出土編組製品素材の同定方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第187集 457-467頁.
- 小林行雄 1964『続古代の技術』塙書房.
- 佐々木由香 2006「割裂き木部材・蔓・草の編み組み加工容器」『考古学ジャーナル』No.542, 13-19頁.
- 佐々木由香・小林和貴・鈴木三男・能城修一 2014「下宅部遺跡の編組製品および素材束からみた縄文時代の植物利用」『国立歴史民俗博物館研究報告』第187集 323-345頁.
- 佐々木洋治・佐藤庄一ほか 1990『押出遺跡発掘調査報告書』山形県教育委員会.
- 篠原浩恵 2001「縄文時代における底部圧痕について」『(財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター研究紀要』第9号 77-94頁.
- 新村出ほか 2008「編組」『広辞苑 第6版』2545-2546頁.
- 杉山寿栄男 1927「石器時代の木製品と編物」『人類学雑誌』第42巻第8号 315-322頁.
- 杉山寿栄男 1930「石器時代有機質遺物の研究概報」『史前学雑誌』第2巻第4号 21-43頁.
- 杉山寿栄男 1942a『日本原始繊維工芸史』原始篇.
- 杉山寿栄男 1942b『日本原始繊維工芸史』土俗篇.
- 浙江省文物管理委員会 1960「呉興銭山漾遺址第一、二次発掘報告」『考古学報』1960年第2期 73-91頁.
- 浙江省文物考古研究所・蕭山博物館 2004『跨湖橋』文物出版社.
- 田代己佳 1999「土器底部にみる組織圧痕の観察について(その1)」『(財)栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター研究紀要』第7号 105-122頁.
- 田中淳夫 2014『幻の水口細工、その復活にかける』甲賀伝統文化活性化実行委員会.
- 谷豊信 1986「楽浪土城址出土の土器(下)」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第5号 73-124頁.

- 中国科学院考古研究所・西安半坡博物館 1963『西安半坡』.
- 中国社会科学院考古研究所内蒙古工作队 1982「赤峰西水泉紅山文化遺址」『考古学報』1982年 第2期 183-198頁.
- 坪井正五郎 1899「日本石器時代の網代形編み物」『東京人類学会雑誌』第161号 440-444頁.
- 角山幸洋 1962「弥生時代織物の問題点」『古代学研究』第32号 16-21頁.
- 角山幸洋 1976「縄文時代晩期の編物」『横田健一先生還暦記念日本史論叢』55-67頁.
- 東京都立大学人類誌調査グループ 2002『人類誌集報2002』.
- 東京都立大学人類誌調査グループ 2005『人類誌集報2003』.
- 富山孝一 2012「九州地方における編組技術の様相」『考古学ジャーナル』No.636, 26-29頁.
- 中川治美 2000「木器・植物製品」『粟津湖底遺跡 自然流路』35-44頁.
- 長沢宏昌 1986「縄文時代前期末～中期初頭の土器底部にみられる編物痕について」『山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター 研究紀要』3, 1-14頁.
- 長沢宏昌 1988「山梨県内出土縄文土器の底部圧痕について」『山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター 研究紀要』4, 1-30頁.
- 永嶋正春 1985「縄文時代の漆工技術」『国立歴史民俗博物館研究報告』第6集 1-51頁.
- 長野真一・井ノ上秀文 1981『宮之迫遺跡』末吉町教育委員会.
- 中村由克 2001『市道遺跡発掘調査報告書』信濃町教育委員会.
- 名久井文明 1998「縄紋時代から継続する編組技術」『縄文式生活構造』24-61頁.
- 名久井文明 1999『樹皮の文化史』吉川弘文館.
- 名久井文明 2004「民俗的古式技法の存在とその意味」『国立歴史民俗博物館研究報告』第117集 185-240頁.
- 名久井文明 2009「縄紋時代から受け継がれた現代網代組み技術」『日本考古学』第27号 1-20頁.
- 名久井文明ほか 2012「特集 遺物にみる編組技術の全国的様相」『考古学ジャーナル』No.636, 3-29頁.
- 南京博物院 1980「江蘇呉県草鞋山遺址」『文物資料叢刊』3, 1～24頁.
- 西田巖 2008『東名遺跡 ―第2次調査の概要―』、佐賀市教育委員会.
- 西田巖・山田広幸・佐々木由香 2009『東名遺跡群Ⅱ』第5分冊、佐賀市教育委員会.
- 額田巖 1965「竹細工の民族学的研究」『物質文化』No.5, 36-55頁.
- 額田巖 1966「Basketryの研究」『物質文化』No.7, 47-61頁.
- 布目順郎 1987「鳥浜貝塚出土のアンギン様編物について」『鳥浜貝塚 ―縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査6―』11-15頁.
- 布目順郎 1988『絹と布の考古学』雄山閣.
- 布目順郎 1992『目で見る繊維の考古学』染織と生活社.
- 任鶴鐘・李政根・金良美 2008『飛鳳里』国立金海博物館.
- 野田真弓 2005「青谷上寺地遺跡のかご(第1節～第8節)」『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告』1, 93-138頁.
- 濱田耕作・水野清一 1938『赤峰紅山後』東亜考古学会.
- 東和幸 1998「鹿児島県の組織痕土器」『南九州縄文通信』No.12, 86-96頁.
- 東和幸 2006「南九州縄文時代の編み物」『鹿児島民具』第18号 4-14頁.
- 久田正弘・中川律子・本田秀生・佐々木由香 2008「白江梯川遺跡の琴とかごについて」『石川県埋蔵文化財情報』第19号.
- 藤崎光洋・中村和美 2006『三角山遺跡群(3)』鹿児島県立埋蔵文化財センター.
- 文化庁記念物課・奈良文化財研究所 2010『発掘調査のてびき』同成社.
- 堀川久美子 2011「日本における遺跡出土カゴ類の基礎的研究」『植生史研究』第20巻第1号 3-26頁.
- 本間一恵 2005「弥生のかごを復元する」『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告』1, 139-144頁.
- 前迫満子・前迫亮一 2006「南九州縄文土器の底部圧痕に関する覚書」『Archaeology From the South』13-32頁.
- 松浦有一郎 2005「中国古代紡織技術の発達と紡織製品」『季刊考古学』第91号 82-86頁.
- 松岡敦子 1981「六反田遺跡出土縄文土器の底部」『六反田遺跡発掘調査報告書』202-230頁.
- 松永篤知 2003「中国新石器時代の「敷物圧痕」について」『中国考古学』第3号 22-45頁.
- 松永篤知 2004「東アジア先史土器の「敷物圧痕」分類について」『金沢大学考古学紀要』第27号 99-108頁.
- 松永篤知 2006「馬高式期の編物技術」『火焰土器の時代』80-83頁.
- 松永篤知 2008a「縄文土器底部の「敷物圧痕」について」『考古学雑誌』第92巻第2号 1-48頁.

- 松永篤知 2008b「網代・敷物」『総覧 縄文土器』942-945 頁.
- 松永篤知 2008c「縄文時代草創期の編物技術」『縄文文化の胎動 予稿集』73-75 頁.
- 松永篤知 2010「縄文時代後期・晩期の編物技術」『正面ヶ原A遺跡から垣間見る縄文社会 予稿集』71-77 頁.
- 松永篤知 2011a「堂平遺跡出土縄文土器底部の「敷物圧痕」について」『堂平遺跡』415-426 頁.
- 松永篤知 2011b「日本列島先史時代の編物」『植物繊維を「編む」予稿集』13-27 頁.
- 松永篤知 2012a「縄文時代後期前半の「敷物圧痕」について」『三十稲場式土器文化の世界 予稿集』119-123 頁.
- 松永篤知 2012b「早月上野遺跡出土縄文土器底部の「敷物圧痕」について」『早月上野遺跡発掘調査報告』第2分冊 305-316 頁.
- 松永篤知 2013a「東アジア先史時代の植物質編物の研究」『名古屋大学学術機関リポジトリ』(<http://hdl.handle.net/2237/17973>).
- 松永篤知 2013b「野地遺跡 SK1 から出土した編物について」『野地遺跡 II』34-38 頁.
- 松永篤知 2013c「縄文・弥生時代の編物」『埋文とやま』VOL.125, 4-5 頁.
- 松永篤知 2014「編物・縄類と縄文土器底部の「敷物圧痕」」『小竹貝塚発掘調査報告』第2分冊 11-18 頁.
- 真邊彩 2013「レプリカ法による土器製作具の復元」『地域政策科学研究』10, 141-170 頁.
- 真邊彩 2014a「複数の編組技法からなる編物底」『Archaeology From the South II』115-127 頁.
- 真邊彩 2014b「下宅部遺跡における縄文土器の敷物圧痕分析」『国立歴史民俗博物館研究報告』第187集 297-322 頁.
- 村越潔 1985「縄文時代の織布について若干の考察」『日本史の黎明』155-167 頁.
- モース (モールス), E.S. 1879『大森介墟古物篇』.
- 柳原梢子 2008「縄文時代のかごの研究」『東京大学考古学研究室研究紀要』第22号 1-40 頁.
- 山本直人 1986「底部圧痕・編物・縄」『石川県能都町真脇遺跡』248-260 頁.
- 山本直人 1989「石川県におけるワラ・タケ以外のカゴ類」『北陸の考古学 II』39-60 頁.
- 吉本忍 1987「あみもの 編物」『文化人類学事典』22-23 頁.
- 米田恭子・佐々木由香 2014「植物珪酸体分析による下宅部遺跡出土編組製品と素材束の素材同定」『国立歴史民俗博物館研究報告』第187集 347-354 頁.
- 渡辺誠 1976「スタレ状圧痕の研究」『物質文化』No.26, 1-23 頁.
- 渡辺誠 1982「弥生時代の釜」『稲・舟・祭』121-137 頁.
- 渡辺誠 1985a「編布の研究」『日本史の黎明』169-207 頁.
- 渡辺誠 1985b「民具の素材」『民具研究ハンドブック』34-39 頁.
- 渡辺誠 1991「組織痕土器研究の諸問題」『交流の考古学』213-232 頁.
- 渡辺誠 1992「編布の変遷」『衣生活と民具』7-23 頁.
- 渡辺誠 1994「編み物の容器一籠と釜・箕一」『季刊考古学』第47号 35-38 頁.
- 渡辺誠 1995「中国新石器時代における編布圧痕の研究」『名古屋大学文学部研究論集』122 史学 41, 1-11 頁.
- 渡辺誠 1996「マタタビ製のカゴ類」『名古屋大学古川総合研究資料館報告』No.12, 83-92 頁.
- 渡辺誠 1999「タケ・ワラ以前の編組製品」『名古屋大学古川総合研究資料館報告』No.15, 73-101 頁.
- 渡辺誠 2000「日本最古の網代」『考古学論究』7, 9-12 頁.
- 渡辺誠 2003a「編布・砂鉄と漆」『新世紀の考古学』177-186 頁.
- 渡辺誠 2006a「藁細工の発達」『考古学の諸相』II, 945-950 頁.
- 渡辺誠 2006b「熊本市上南部遺跡出土の組織痕土器について」『名古屋大学博物館報告』No.22, 11-17 頁.
- Palmgren, N. 1934 *Kansu mortuary urns of the Pan Shan and Ma Chang groups, Palaeontologia Sinica, Series D, vol. III, Fasc.1.*